

Q&A

このコーナーでは、疾病や繁殖への質問、往診時には聞けなかったことや今更聞けないことなど、みなさんの疑問にNOSA I職員がお答えします。

別海町別海の女性より

『黒毛和種の子牛の白っぽい下痢がなかなか治りません。ミルクは飲むので獣医さんに診せるほどではないのですが気になります。なにか対処法はありますか?』

この問いに根室南部事業センター第二家畜診療課の中村紫乃獣医師が答えます!

黒毛和種子牛は、ホルスタイン種子牛に比べ下痢や肺炎などを起こしやすく、哺乳期の管理についてお悩みの方も多いと思います。明日へのかけはし第17号で、「和牛の哺乳の注意点と下痢予防について」の記事が掲載されています。黒毛和種子牛の生理的特徴については、そちらを参考にしてください。

今回ご質問いただいた白っぽい下痢のことを「白痢(はくり)」と言います。

白痢は、消化不良やウイルス・寄生虫などの感染により起こります。抗生剤、整腸剤を与えても何となく便が固まらず、だからと言ってミルクを飲まなくなるわけでもないの、獣医さんと呼ばうかどうか悩む：といった経験が皆さんにもありませんか?この場合「母牛の管理」「代用乳の給与法」が原因で起こる消化不良性の下痢が疑われます。

分娩前の母牛の管理について

妊娠後期の胎子は急激に大きくなります。この時期は乳牛にとつての乾乳期間と一致します。この期間の

母牛をいかに健康に保つかが、哺乳子牛の下痢予防につながります。栄養不足の母牛から作られるミルクは不飽和脂肪酸が含まれ、これを飲んだ子牛は消化不良を起こし白痢になります。栄養不足にならないように、妊娠後期の母牛には良質な乾草を飽食させてください。この時期に、母牛への乳酸菌製剤投与、ワクチン接種、駆虫等をしておくこともおススメです。

代用乳について

代用乳の適切な給与法も、下痢予防のポイントとなります。子牛は変化に対応する能力が低く、代用乳の調整法が変わっただけで消化不良を起こします。移行期に下痢をしやすいのこのためです。低体重の子牛は消化機能が未熟であることも考慮し、1回の哺乳量を少なくして、回数を増やすことも下痢予防になります。小さめの哺乳瓶を使うこともおススメです。

代用乳は「定時・定量・定濃度・定温」が基本になります。

- ・定時：子牛に代用乳を与える時間は一定であること
- ・定量：専用のカップを作り粉乳の量をしっかり計量すること
- ・定濃度：粉乳の量と湯の量の比率を一定にし、完全に溶かすこと

※湯を入れた後粉乳を入れる。

湯は60℃未満であること。

- ・定温：子牛の口に入る温度は夏と冬で一定にすること
- ※冬は冷めやすいので注意。

作る人が変わっても、代用乳の調整法は変わらないことが理想です。感覚的に調整することもありますが、人の感覚はずれていくものです。こまめな計量、温度の測定が必要です。

その他の注意点として、代用乳が足りない、子牛はその後水をがぶ飲みすることがあります。これも消化不良の原因となりますので、代用乳を飲ませた後30分はバケツによる水のがぶ飲みを防ぎましょう。

環境衛生について

敷料の管理も重要です。一見きれいでも、敷料の下が糞尿で湿っていると、厳冬期ではあつという間に体温を奪われ、おなかを冷やすことで下痢を起こします。敷料の管理は感染性下痢・肺炎の予防にもつながりますので、ぜひ意識していただきたいポイントです。

経口投与剤について

下痢止めの経口投与剤にはさまざまな種類がありますが、白痢には消化酵素剤を含む「ビオベア」や、脂肪の消化吸収を助ける「ウルソ散」が有効です。代用乳投与前に、ごく少量のぬるま湯で単独投与してください。

消化不良性下痢の予防に特別なことは必要ありません。母牛の管理や哺乳の手順を見直すことで制圧できるかも知れません。実践できるポイントから取り組んでみてください。

今回は白痢についてご説明しましたが、実際には下痢の原因は多様で、すべてに今回のお答えが当てはまるとは言えません。気になることがあれば、獣医師にご相談ください。